

三一新書 376

女子高校生

山 本 洋 著

山 本 洋
やま もと ひろし

1932年 滋賀県に生まれる
1954年 京都大学文学部国文科卒業
現 在 高校教諭
著 書 『高校生手帳』Ⅳ共著（三一書房）
現住所 滋賀県滋賀郡堅田町本堅田1530

女子高校生

定価 230 円

1963 年 4 月 8 日 第1版発行

著 者 © 山 本 洋
1963 年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 暁印刷株式会社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電話東京 (201) 9 5 8 1~5 番

振替東京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 376

編集担当 寺村嘉夫

女子高校生

山本 洋 著

三一書房

目次——女子高校生

第一章	成熟する季節	五
第二章	恋の進行形	三
第三章	不安な方程式	七
第四章	友情の文法	一〇
第五章	真夏の決算	一七
第六章	絶対主義の崩壊	一八
第七章	生徒会の反作用	一九
第八章	美の連帯	二六
あとがき		二四

第一章 成熟する季節

成熟した卵巣には、卵子になるべき細胞を一つずつもっている卵胞が多数用意されていて、そのうち一個だけが月経周期ごとに発育してくる。……卵胞は成熟するとき卵胞ホルモンを生成し、排卵後の卵胞は黄体というものになって黄体ホルモンを生成する。——高等保健体育 大修館書店より

三月二五日、春休みの第一日目だ。番村麟太郎は、午前六時に目をさました。母親は、すでにいない。陽が古びた畳にさしこんでいる。

昨日の終業式後、LHRで、番村麟太郎は担任の水野先生から注意された。昨年度一年間で、朝の遅刻が一一六回もあったからだ。S北高校はじまって以来の、ずばぬけた回数である。

温厚な水野先生が厳しいしわを眉間によせていった言葉が、頭に残っている。

「君は、からだも頑丈だし、負けん気も強い。口も達者だし、心臓も強い。君のいいところだ。だがね、君は、意志が弱い。意志が。朝寝坊で遅刻するのは、意志の弱さから来てるんだ。君はどう思う？ えっ、そうじゃないか？」

まさしく痛い指摘であった。朝の寝起きの悪さは、自分ながら歯がゆかった。そこを切り込

まれたのだから、ふだんはコンニャクみたいに頼りないと思っっている教師でも、けっこう辛辣な批評眼を持ってるんだなあ、とつい感心してしまった。感心した結果、

「はい、自分でも、そう思うんです。」

といった。神妙な顔であつたに相違ない。しかし、このまま引き下がっては、番村麟太郎なる男の名折れた、と思つた。

「でも、先生、睡眠中は、意志が活動しないんです。」

そして、水野先生から猛烈に怒鳴りつけられたのであつた。

早く目がさめたのは、水野先生の注意のせいということもある。が、それよりも、今日からは春休みなんだ、一日は大へん貴重なんだ、そういう感慨が早起きをさせる原動力になつたのである。番村麟太郎は、そう考へた。寝まきを脱ぎながら、この一日は完全におれのものだ、退屈な講義を窮屈な机にへばりついて聞かされている学校での一日、それとはまったく違ふ一日だ、と思つた。やらねばならん計画がわんさたとある。

朝日のさしこんでいる二階の二部屋は、みじめさが際立つた。畳はへりが破れ、うす汚れている。襖は、女優のグラビア写真が貼られて、破れ目が隠されている。壁は、隅がくずれ落ちている。朝日は、赤茶け、しみのついた窓ガラスの向うに、輝いている。

番村麟太郎は、母親と二人きりで、この二階に住んでいる。父親は日中戦争で死んだ。麟太郎と年が一三も違う長兄は、おなじS市に、結婚して一家を構えている。母と麟太郎の世話を

嫌がって、別世帯を持っているのだ。次兄は、京都の織物問屋の住みこみ店員だ。姉は結婚してこれも京都にいる。母親は、あとわずかの辛抱だ、なんとかして麟太郎に高校を卒業させてやりたい、と願ひ、麟太郎と二人だけで以前からの家に住んでいる。階下の部屋は、二人の生活には余分だから、他人に貸した。けれども、長兄と次兄から毎月送られてくる金だけでは、もちろんとうていやって行けない。そこで、母親は、朝四時から豆腐屋へ手伝いに行き、七時半に帰ってすぐ、S市の自由労務者として道路工事や清掃の仕事をしているのである。

朝日が照らしだしたみじめな部屋のさまを見ると、番村麟太郎は、里岡さちから借りてきたジイドの「狭き門」でも読もうか、という氣を失った。みじめさを実感することが嫌なのだ。学校へ行こう。勉強机にも使っている塗のはげた机のうえに朝食の用意がある。つけものと味噌汁とですませて、番村麟太郎は、うす暗い階段をおりた。

七時すぎに学校に着いた。歩いて一五分ぐらいの距離である。新聞部の部室は、校門を入ってすぐ左手にある。講堂の玄関を仕切った一部屋だ。

講堂の側面には、二つの入口がある。職員室まえから渡り廊下を経てゆく入口。もう一つが玄関だ。その玄関は、二つの入口を持ち、玄関内部の空間はかなり広い。その空間をベニヤ板で半分に区切り、一方の区切りを講堂への通路、他方を生徒会室と新聞部室とに当てているのである。

番村麟太郎は新聞部部長である。いつも持っている鍵で、部室へ入る。もちろんだれも来て

いない。部室は、タイルの床の上に、長机が二つ、その周囲に長椅子が配置され、書類戸棚によって、生徒会室と仕切られている。入口側の壁には小黒板が、窓側にはブラックの複製画が、掛っている。

新聞部で、この春休みに、「新入生のためのガイドブック」をまとめよう、ということに決定されていた。集合時刻は九時である。まだ早すぎる。番村麟太郎は書類戸棚からザラ紙を五、六枚取りだした。ガイドブックの詳細については、おおよその腹案がある。抽き出しからエンピツを出して、腹案をメモしはじめた。きわめて乱雑な字である。

題名 新一年生ガイドブック

新入生のための生徒会活動あんない

生徒会活動の手引き

新入生のためのガイドブック

このうちから選ぶ。他にあれば、可。

意図 新一年生に生徒会活動・クラブ活動の意義を知らせ、積極的に参加させる手引きとする。

学習面についても、紙面の余裕があれば、考慮してよい。

頁数 八頁〜一〇頁 あるいは一二頁

型 A5版

部数 新入生

三〇五部

生徒会・各部用 三〇部

学校・教師用 五〇部

その他 一五部

計 四〇〇部

印刷 タイプ印刷

印刷屋？ 市内でやらせる

内容

番村麟太郎がここまでメモを書いてきたとき、校庭の砂利をふむ足音が近づいてきた。と思う間に、足音はパタパタと駈けだし、部室の重い戸が、がたがたとときしんで動いた。そこに花本悠子の小柄な姿があった。目が驚いていた。

「まあ、番村さんなの？ えらく早いのねえ。」

「そりゃ、部長ともなればね。はじめて、ぼくの責任で、一から十までやる仕事なんやもの。」

番村麟太郎は、まじめくさった顔で、ぬけぬけと喋った。

「ふっふ。」

と花本悠子は、背の小さなからだをゆすって、笑った。濡れたように輝く瞳や、首の気どったかしげかたや、よく伸びた上体の胸のふくらみから媚態がこぼれた。

「知っててよ。あんたのさ、朝寝坊のことぐらい。コンニャクにだいぶ絞られたっていうじゃないの。あたしは、ごまかされないわよ。」

ふたりは、科が違う。花木悠子は家庭料二年六組、番村麟太郎は商業科二年二組であった。けれども、花木悠子は、そのような情報に敏感であった。

番村麟太郎は、身長一七三センチ、肩幅の広い、がっちりした体軀である。髭あとの濃い丸顔に、どんぐり眼がくつついている。

「なんや、知ってたんか。おれのハッターは、きみには効きめがないなあ。しかしね、知ってるか？　ぼくの遅刻回数は、学校創設以来の新記録なんやで。一一六回や。」

番村麟太郎は、冗談めいた負けん気を出した。花木悠子は番村と向かいあう位置の長椅子に腰をおろし、やや沈んだ調子の声でいった。

「あんたが新記録なら、あたしは殺人犯なのよ。」

花木悠子は、つぶらで黒く濡れた瞳を番村から長机のうえに落し、番村の反応を伺うかのようには深刻な表情をことさら作ってみせた。

「ああ、峯の自殺。それで、きみも早く学校へ出てきた、というわけやな。しかも、春休みやいうのに。」

「ええ、一昨日から、全然くさってんの。休みになって家にいたって、それもつまらないし。新聞部の仕事してるほうが楽しいわ。番村さんのガラガラ声、聞いてるほうがまし。」

番村麟太郎は、にやりとした。

「おれは、ガラガラ声の男か。ちえっ。すると、きみは、パッパッ娘や。」

花木悠子は、笑った。番村麟太郎は口が悪いが、開っぴろげで憎めない。自堕落なところもあるが可愛げがある。気障っぽいところもあるが、純情でもある。担任の水野先生も、顧問の山中先生も、その他の多くの先生も、番村麟太郎のその性格を認めている。

「ところで、峯のこと、なにもきみが殺した訳やない。峯が弱かっただけやないか。なにも苦にすることなんか、あらへんやない。」

「そうは思うんよ。だけど、気が重い。ひとが、あたしを殺人犯みたいに考えてるんじゃないかしらと、思えるのよ。」

番村麟太郎は、いつものがさつないいかたでなくいった。

「気にするなよ。ひとりで思いつめて自殺した者に責任とってたら、体がいくつあっても足らへん。そんなんやったら、自殺すると脅かされたら、どんな男でも愛しなければならなくなる。そんなバカな論理はないんや。」

「あたし、峯さんの自殺の原因には、あんたも関係があると思うんだけど。」
と、悠子は番村の目をじっと見つめた。

「おれが？ そんなバカな。」

番村麟太郎は、大人びた表情で媚びるように振舞う悠子に対して、平静な態度でつき合える

唯ひとりの男子生徒といってよかった。

男子生徒間の噂によれば、花木悠子は、目につく男の子には、だれでも接近して行く、というものである。悠子の華やかに開いた媚態に応じて相手の男の子が積極的な姿勢を示してくると、花木悠子はひらりひらりと身をかわす。その変転のさまは、意識的な行為のようでもあるし、また、天性の無邪気さとも受けとれる。さらに、あるばあいには、より以上の行為を求めているかのような素振りを見せる、というのである。おなじ二年生で、不良の第一人者とみずから自負している柿田啓介にいわせると、こうだ。もつとも自慢話の一種だから割引きして聞かねばなるまいが。

「城山公園を夕がた散歩して、ペンチに腰かけたんや。だいぶ暗かった。そしたら、いかにも接吻してほしいような顔付きで、わいを見よる。ウインクちゅうか、流し目で、すこし顔上向けてな。そして、こういいやがる。『胸ん中が苦しいわ。柿田さん。』しかしな、わいは接吻もまだ童貞や。経験がないから、下手な接吻して、あとで花木に、『柿田さんの接吻って、下手やわ。』てなこといわれたら、わいの面目まる潰れやさかいな。ほんまに、あの花木という奴は、男心を掻き乱しよる奴やわ。」

それで、S北高校の男子生徒で花木悠子を知っている者は、その成熟した感じの魅力に心ひかれるか、それとも、年上の女性に対するように敬遠するか、どちらかであった。高校二、三年の男の子の心理では、その媚態にみちた振舞いが理解できない。そうかといって、そんな花

木悠子を圧倒しざる強い行動も取れない。だから、花木悠子に心ひかれ、花木悠子を好きになった男の子たちは、悩み惑乱し煩悶する。一年上級の峯行雄は、花木悠子のこと非常に悩んでいたのであった。

峯の自殺については、一昨日の職員会議で問題になった。年度最終の職員会議である。その冒頭、三月一日に卒業したばかりの三年生の担任、中岸先生が立ちあがった。

「えー、突然のことなので、議題として提出しなかったのですが、卒業した私のクラスの峯行雄が昨夜おそく自殺しました。」

教師の大半は、そのニュースを聞き伝えていた。朝刊には、まだ載っていなかった。初耳である教師もいた。会議室のなかの視線が中岸先生に集中した。教務主任の橋田先生が、おずおずと、

「その件は、そのう、後回しにして頂いたら……。」
と発言した。

「そうも思いましたが、えー、現二年生にも関係がありますし、それで、えー、処置というか今後の指導のこともありますから、最初に発言させてもらった訳です。それにですね、私、二時からの葬儀に参列しなければなりませんので、えー、その点、お認め願いたいと思うのですが……。」

「その報告を続けて頂きましょう。」

静かな声で議長の村井先生がいった。つめたいほど品のある中年の女教師である。中岸先生は説明をつづけた。

峯行雄は、名古屋のN商事に就職が決定していたこと、昨夜は、食欲がないといって、夕食をたべずに二階へ上り、母親が心配して一〇時ごろに二階へ行って発見した。睡眠薬を飲んだらしく、市立病院へ運んだが、駄目だったこと。

遺書めいたノートの切れ端に、萩原朔太郎の、春なのに憂鬱である、という意味の詩が記されてあり、そのあとに、「ぼくは恋の主体性がない。」と書かれていたこと。当局の結論は、失恋自殺と見ている模様だ、ということ。

それから、中岸先生は、峯行雄の性格その他について述べた。無口であったこと、小心で思いつめる性格であったこと、まじめであったこと、萩原朔太郎の詩集をよく読んでいたこと、心から打ち明けて話し合える友だちのなかったらしいことなどである。

「えー、弁解のようになりますが、私は数学をやっております関係上、どうも詩とか文学とか、えー、そういうものは苦手で、えー、また文学的な生徒も苦手で、そういう点、峯の相談にのってやれなかったことを非常に遺憾に思っております。」

ここで中岸先生は、うなだれた。それから、顔を上げた。

「えー、それで、先ほど申しました現二年生と関係がある、という件ですが、えー、峯の恋

愛の相手というのが、どうも二年家庭科の花木悠子らしいのです。えー、まあ、恋愛というといけないうかもしれないかもしれませんが、峯が悩んでおったその対象は、花木悠子なのです。遺書に花木の名など書かれておりませんし、花木からの手紙もなかったようです。えー、しかし、生徒間の噂だけでなく、峯の悩みの相手は花木悠子である、ということは確かだ、と思います。たとえば、そうでないとしても、花木悠子は素行上問題のある生徒ですから、なんとかしないと……」

会議室に、ああ、あの子か、という感慨のざわめきが広がった。授業は持っていないけれども、新聞部の顧問として接している山中先生は、小柄な花木悠子の姿を思い浮かべた。小柄であるけれども、ぴちぴちと成熟している。顔立ちにも、白い皮膚の下にも、じゅうぶん女であることを思わせる潤いが見てとれた。目だつ子である

中岸先生が続けた。「えー、それで、花木悠子について、職員会議で問題にする必要があると思うんですが。」

花木悠子を担任している本田先生が立ち上った。

「問題にする、というのは、どういう意味でしょう？ 峯を自殺に追いやった張本人として処罰でもせよ、といわれるのですか？」

「このまま放っておく手はありませんな。えー、こんな不祥事の陰の人物ですから。あの子は、素行上の要注意者です。異性関係の問題の中心には、いつも花木がいる。台風が目みたい